

## 卒業論文の要旨

論文題目	桜美林大学収蔵標本のオープン化:生物多様性情報の拡充と共有
氏名	青木未来
メジャー	生物学
<p>(要旨)</p> <p>「どのような生物が、どこに、どれくらい存在するのか?」という生物多様性情報は、生態系や生物多様性の状況を把握し、その保全、保護対策を検討するための基盤データとなる。2010年に生物多様性条約の目的を達成するために掲げられた愛知目標をきっかけに、生物の観察・標本データが世界的な生物多様性データベースである GBIF に着実に蓄積されてきている。しかしながら、登録されているデータ地点や分類群には偏りがあり、生物多様性情報の共有は、まだまだ不十分な状況である。本研究では、桜美林大学に収蔵されている、約 9,000 点の標本を地球規模生物多様性情報機構 (GBIF) のデータベースに登録しオープンサイエンスに貢献するとともに、桜美林大学の収蔵標本の特徴を明らかにすることを目的とする。桜美林大学に収蔵されている標本は、GBIF に登録されているデータに比べ、桜美林大学周辺での標本が多く、イネ科の標本が充実しているという特徴が見られた。また、採集年ごとの標本数で見ると 1984 年と 2015 年をピークに持つ 2 山分布となっていることが分かった。収蔵標本の多くは木場英久博士によって採集されており、その専門分類群や研究・教育履歴と一致していた。イネ科は種同定が比較的難しい分類群の一つであるため、桜美林大学の標本は専門家により種同定された貴重な標本といえる。本研究を通して、桜美林大学に収蔵されている 9012 件の標本データを GBIF に登録する手続きを進めることができた。この中には 316 件の絶滅危惧種のデータも含んでおり、今後、保全策の検討などに利用されることが期待される。</p>	
<p>(指導教員の推薦のコメント)</p> <p>本研究は、元桜美林大学教授である木場英久博士の研究・教育活動の中で収集された約 9000 点の標本の在情報を GBIF へ登録する手続きを進め、収蔵されている標本の特徴を仮説検証の形で明らかにした。オープンサイエンスに貢献しただけでなく、既存データとの比較を通して、桜美林大学の標本の価値を明確にした研究であり、高く評価できる。</p>	